

悔いの残らない人生を

— NPO小谷山村留学育成会の 役員になって —

第一回 私の人生、常にチャレンジ

私の名刺の裏には、

- ・ NPO法人小谷山村留学育成会 副理事長（地域に元気をもらおう子供たちから！ 大人もいっしょに山村留学）
 - ・ NASL地球環境フォーラム 副代表（自転車を使った6K運動（環境・健康・交通・観光・交流・経済）
 - ・ 飛天隊 隊員（風揚げで世界中の仲間と国際交流）
 - ・ 田毎の月棚田保存同好会 会員（脱穀・交流班長）（みんなで米作り、棚田の景観保全でいい汗かこう）
 - ・ 7日会 副代表（農林業体験で地域おこし、ブルーベリー、とうもろこし、地大根など野菜作り）
- と書いてあります。
- また、追加で
- ・ 人づくり、森づくり22 会員（山に親

しみ、おつきあい、間伐など森林整備でCO2削減）

を入れようかなと思っています。

こんな肩書きももっているいろいろな活動をしています。

これも県民の声を直接聞き、仕事に活かす、県民から学ぶ、触れ合い、ともに汗を流し、苦勞し、悩み、喜びを共にすることのできるチャンス、人生を楽しくするチャンスと思いい活動をしています。

ちよこつした出会いが

平成一六年一月、財団法人長野県職員互助会の専務理事だったときです。

小谷村などを所轄する地方事務所建設業者の支援業務を行っていた職員が、小谷村で建設業を営む人を連れてやって



割田 俊明

長野県総務部職員課
企画幹兼課長補佐兼厚生係長

【わりた としあき】昭和28年生まれ。平成元年職員課に異動となり、H2年地方公務員等ライフプラン協会設立時ライフプランを担当し、「46歳対象のライフプランセミナー」「50歳の夫婦参加の人生エンジョイセミナー」などのセミナーを企画。平成14年財団法人長野県職員互助会専務理事就任。退職期ライフプランセミナーを確立。平成20年度3度目の職員課勤務となり現在に至る。

きました。

その業者の人は、近年の公共土木事業の削減等で経営が厳しく、建設業以外の分野の事業も行いたいと、福利厚生事業を行う大手業者の代理店となったのでその相談にやってきたのでした。

話の中で、小谷村の中谷地域も経済の落ち込みが激しいことや、高齢化が急速に進んでおり、地域の元気がなくなってきた。何とかしなければと、とくとくと話をするのです。

私も他の地域で活性化のためのボランティア活動をいろいろやりましたので、その活動の話をし、その場はそれで終わりました。

年が明け翌年一月、最初に会った人が、地域で頑張っている七〇歳を過ぎた山本さんという人を連れて再び県庁にやって



「全国の百名山」にも選ばれた雨飾山を登山する山村留学の子ども達

来ました。山本さんは、自ら炭焼き窯を造り、ブルドーザーさえあれば設計図も持たず、どんなに荒れた田畑でも復元してしまおう。また、炭焼きやそば打ちなど様々な体験が出来る施設「おらが里」を営んでいて、村内だけでなく大北地域でも名の知れたおやしさんでした。

その山本さんが私の活動を熱心に聞いてくれました。その時は、まさかこの地域のために何かお手伝いをする事になるうとは思っていませんでしたし、山本さん達も、あまり今の仕事に関係のない県の職員が応援してくれるという期待をもつていなかったのではないかと思います。

ある雪の降る休日、以前の山本さん達の話が気になり、山本さん達の住む小谷を妻と訪れました。その村は、山里の原風景をそのまま残しており、私の好きな画家である原田泰治さんが描く、自然のなかで素朴に暮らす人々や雪を被った木々、雪深い山の景色そのものでした。

私が生まれたところも雪の多いところでしたが、それよりもはるかに雪の量が多く、私は冬の暮らしは大変だなと思いつつながら、逆に雪をうまく利用して楽しくする方法もあるなと思いました。すばらしい自然という資源を持ったこの地域で暮らす人が、諦めずに少しでも元気が出るよう何かできることがないかと、現地を訪れ、支援の気持ち私の心の中に現

れてきました。

初めのミニ講演

四月の異動で、私は小谷村を所轄する大町市にある現地機関に転勤することになり、それを知った山本さん達が「これはいい人が大町に来たぞ」と早速、赴任間もない私の職場を訪れ、先に県庁で会ったときに話してくれた割田さんの活動ぶりを地域の皆に話してほしい、中谷地域が元気になるようにしてほしいと熱心に頼むのでした。

そのとき、私はそんな人様の前で話すような活動はしてないと一旦は断りましたが、皆さんの熱意に負け、地域の方が元気になれるならとミニ講演を引き受けることとしました。

そのミニ講演の日は、赴任してまだ一カ月も経たない夜のことでした。

会場の中谷地域地区集落センターには、四〇名くらいの人が集まっていました。私なりに感じたことをありのまま話そうと簡単な資料をつくり、それをもとに、「中谷地域が更に元気になるために」というテーマで約一時間半、皆さんは熱心に私の話を聞いてくれました。

- ・私の体験から
- ・この地域が元気か
- ・わが地域の自慢、課題、悩みは何か
- ・元気のいい中谷地域を創造する
- ・さあ始めよう！ 激しく込み上げて

くるようなやる気と熱気が感じられる中谷地域を目指して

- ・ここには見えない資源や埋もれている資源の発掘など

ミニ講演が終わり、皆さんと懇談をしましたが、

- ・今回の講演を皆に聴いてもらうため村の有線で流した
- ・今まで村の懇談会などでこの集会場に住民を何度も集めたが、こんなに大勢集まったのは初めて
- ・県職員が今まで中谷谷に来てこのような話をしてもらったのは初めてとのことでした。

名前も聴いたことのないただの素人の話を聴くためにかつてない多くの住民の方が集まり、熱心に聴いてくれたことに私は感謝し、これを機会に是非この地域のために頑張りたいという気持ちを私の心の中にしっかりと植えつけることが出来ました。

中谷郷が元気になる会の結成

その後、何度か中谷地域を訪れ、皆さんと話し合う場面をつくり、地域の現状を知り課題を明確にした上で、課題解決策の検討や地域の強みを更に強くする施策を実施することになり、まず、住民アンケートを行うことを提案するとともに、有志で組織する「中谷郷が元気になる会」



荒廃した棚田に自生した巨木の伐採作業をする永島さんと地域の皆さん

を達成しました。会には、総務企画部・棚田部・家庭菜園部・食文化部などの部を作り、地域資源を活用した都市と農村との交流で地域活性化のため活動をするごじました。

会では、いろいろな課題ややりたいことがあるが、先ず等身大で出来ることから始めようと棚田の復活を提唱し、県の補助金を使って自分達だけの手で棚田を三〇年ぶりに復活させることができました。また、復活した棚田を都市と農村との交流の拠点にしようと、私と仲間で一〇年以上前から「田毎の月」で有名な千曲市の姨捨で、棚田の保存活動をしています。この活動がきっかけとなって千曲市で耕作放棄された棚田を整備し、田のオーナー制を設けたのを参考に、小谷でも棚田オーナー制を取り入れました。こうした「中谷郷が元気になる会」の地域の資源を生かした都市との交流活動が、農林水産省の「立ち上がる農山漁村」の優良事例として全国三〇選に選ばれました。

永島敏行氏の支援

私は一〇年くらい前から俳優の永島敏行さんのお付き合いをしていました。永島さんは、平成四年ごろ秋田県で初めて米作りを体験して以来、食・農に関心を持ち、自ら全国で農業体験を通して様々な生産者と接することにより地域の

人たちと夢、課題・現実を語り合っていました。

そうした活動をしている永島さんに、小谷村を知ってもらおうと声を掛けたところ、俳優という忙しい方にもかかわらず小谷村を訪ねてくれ、住民に気楽に声を掛け、自然の中で色々な体験をするなか、冬の厳しい自然の中で力強く生きるお年寄りなど住民の人たちとの交流などしていただきました。このことがきっかけで中谷地域の皆さんとお付き合いが始まり、三〇年ぶりに復活させた棚田も永島さんが一生懸命手伝ってくれました。

今では田植え、稲刈りなどの農林業体験ツアーを自ら企画し、毎年大勢の仲間を連れて小谷村を訪れ、交流が続いています。

山村留学の存続を願う 住民の叫びと挑戦

地元には大きな課題がありました。それは、二〇年以上前から村が続けてきた山村留学を村内にある三つの小学校が統合されることなどを理由に、平成一七年度をもって廃止することとなったのです。中谷地域にあった中土小学校には統合になる最後の小学校の生徒数が二九人、うち山村留學生が一五人でした。当時、子どもが少なく村内の生徒だけでは複式学級になってしまうことに危機感を持ち、これを解消するため村の政策として山村

留学制度を導入したのです。

山村留學生は、山村留学センターで共同生活をしながら、週に一度地域の民家に宿泊する里親制をとっていました。学校へ通う子ども達の「おはよう、こんにちは」という大きな声に、励まされ、張り合いを持ち、元気をもらってきた地元の人達にとつて、山村留学が無くなってしまうえばこの地域の火は消えてしまうという、叫びの声、嘆きを聞きました。教育委員会が決めたこととはいえ、何とかできないかと永島さんにも相談しながら、山村留学の継続を願う住民の叫び、小谷が好きで村に来た子ども達の願いを何とか叶えてあげたいと考え、地域の人たちによる自主運営の道を探り始めました。

一五人の子ども達や親は皆悲しみに暮れ、「小谷に残りたい」と。新たな受け皿をつくるため、私も永島さんも加わり、山村留学の継続を願う中谷地域の住民や村内の有志も真剣に悩み、何十回にも及ぶ議論を重ねました。最終的な結論は、当面小谷に残りたいといった子ども達六人を地元で預かり、残された指導員三名で村から譲り受けた山村留学センターでの生活を始めていくことを決意しました。しかし、自主運営していくには生徒の数が足りません。二〇人くらい生徒がいないと経営が赤字になってしまいます。

本来なら生徒募集に教育委員会の許可はいらないのですが、自主運営とはい



集団生活する寄宿舎から4キロ先の小学校まで元気に歩いて登校する 山村留学の子ども達

え、教育委員会が決めた方針に逆行するものであり、住民の皆さんとしては、色々な形で支援してもらおうことが得策と考え、教育委員会へ新規生徒の受け入れに理解をしてもらおうよう要請しました。要請に對して、今は統合小学校になったことによる課題が多く、山村留学生を新たに迎え入れる余裕は学校にはない、との返事。何度か交渉したが了解を得られない。

「あきらめるか」との声も出、脱落する人も出始めました。やはり諦めるわけにはいかない！赤字を出さずに運営するには企業の寄付が不可欠であると、今法人格のない組織で運営しているが、NPO法人になれば企業からの寄付を募り易くなるし、補助金を受けることも可能になることを説明、再三にわたる議論の末、法人格を取得することを決意しました。私も他の活動でNPO設立を考えていたこともあり、NPO法人設立のための応援をさせてもらい、ようやく、平成一八年六月「非営利活動法人小谷山村留学育成会」を設立し、運営を続けてきました。

しかし、なかなか資金が集まらなく、このままでは平成一九年度はこの事業を継続することが困難であるという判断から、今の生徒も預かることを断念し、一八年度末で一日長期山村留学を休止する決断をしました。子ども達や親、地元の方皆さんも残念で残念で仕方ありません

した。

一九年三月、涙の山村留学センターのお別れ会を開きました。子ども達からは、「小谷が好きです。離れたくありません。是非再開してください。戻ってきたいです。」涙の訴え。その日永島さんからメッセージが届き、私が御披露しましたが、メッセージには、必ず復活させるとの心強い応援の言葉が書かれており、私自身も涙が出て仕方ありませんでした。

その後は、粘り強く長期留学復活に向け小さいながらも、夏や冬の体験を中心とした短期山村留学を続けています。地域の皆さんの自立に向けた闘いですが、マスコミにも取り上げられ、長野県の地元紙である信濃毎日新聞に「民が立つ」の長期連載シリーズの中で「山村留学小谷・中谷郷の挑戦」として平成一八年四月二五日から五月一五日までの計一六回にわたり連載されました。

いつか必ず

私は、今まで後方支援的な立場で応援していましたが、責任ある立場で住民の皆さんの夢が叶うよう、理事、今では副理事長として微力ではありますがお手伝いをしています。永島さんも一生懸命応援してもらっています。

長期留学中止後も、都市と農村との交流を通して地域の活性化を図ることが大事である。子ども達が豊かな自然や温

かい人情を持った地域の皆さんとふれあ

い、自然の中での生活から豊かな感性を育んだり、地域も元気になれる。ということに確信をもって、私達のNPOが主催者となりシンポジウムを毎年開催し、行政、住民の皆さんにも訴えてきました。平成二〇年度からは、全国の一二〇万人の小学生の子ども達に農山漁村での農林業体験等を通して過疎地域の活性化を図るという大型プロジェクトが総務省、文部科学省、農林水産省の合同事業としてスタート。国も動き出しています。

私達の運動は必ず実を結ぶことを確信しております。

私は、最初の出会いから小谷村へは仕事を終わって夜の打ち合わせ、休日、年休をとったりしながら、自宅から往復約八〇キロ、四年間に何十回と小谷に足を運びました。苦勞と思つたことは一度もありません。それは、皆のためになるのならという思いだけです。

私は、NPOの役員を続けます。住民の皆さんの夢が叶うまでは！

小谷が好きでたまらない子ども達や地域の皆さんが、元氣になり喜ぶ顔が見れる日も遠くないことを確信しています。

皆のためにも、自分のためにも、自身をほめることができるまでは諦めません。

今をどう生きるか、チャンス逃しては一生の悔いが残ります。(つづく)